

## 先住民文学の始まり

——『コシヤマイン記』の評価について

西 成彦

### 一、大日本帝国と先住民の懐柔

「台湾」というときの「台湾」が、「大員」と同様、古くからあった地名への「あて字」にすぎないのだとしたら、本州流の命名法の流用で「北海道」と名付けられることになった島を、たとえば「アイヌモシリ」の名前で呼んだとしても、さほど突飛なことにはならないだろう。花崎阜平は、この「アイヌモシリ」の「モシリ」を「静かな大地」というふうを意識してみせ、作家・池澤夏樹は、それを受け、明治初期の開拓者と先住アイヌ民族との交流を描いた小説を、そのまま『静かな大地』と題したのだった。

もともと、「内地」から来る開拓者が「屯田兵」の名で武装していたのとコントラストをなすかのような先住アイヌ民族の「平和≠非好戦主義」なるものは、それこそ『アイヌ神謡集』（一九二三）の知里幸恵から産み出された「創られた伝統」にすぎないのかもしれない——《その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、なんといふ幸福な人たであつたでしやう》。遠星北斗の次のような言葉も、ある意味では、この神話形成に加担したと考えるべきだろう——《アイヌからは大西郷も出なかつた。アイヌには乃木将軍も居なかつた。一人の偉人をも出さなかつたのは実に残念であ

る。併し、吾人は失望しない。せめてもの誇りは不逞アイヌの一人も出なかつた事である。／＼朴烈や 難波大助 アイヌから／出なかつた事せめて誇らう》。

しかし、金田一京助が収集した「虎杖丸」や「葦丸」など、アイヌの英雄伝説をみるにつけても、アイヌの伝承のなかには勇敢さを称えられる武将が数々登場する。要するに、アイヌは「征夷大將軍」を名乗って本州から四国・九州を「平定」するような強大な政治権力が成立するまでには至らなかつただけで、その民族そのものが「平和」を愛する民族であつたと考えるのは「戦争と平和」という二項対立的な図式に縛られた思考法であつて、強大な権力を誇つた「ヤマト」こそが戦乱に明け暮れる先住アイヌ民族を「平定」したという説明もまた可能なのである。「平和」とは、圧倒的な武力を用いた「平定」にすぎず、そうした「圧倒的な武力」の集中のない地域こそ、かえって内紛の絶えない世界でありうるのだ。要するに「戦争と平和」という二項対立は、むしろ「平定と抵抗」の対抗関係と考えるべきで、今日も時代はますますそういった理解図式の前景化を要請している。そして、長らく「蝦夷地」の名で呼び習わされた地域は、コシヤマインの戦い（一四五七）や、シャクシャインの戦い（一六六九）といった、後腐れを残す衝突を重ねるうちに「平定」が完成形へと近づき、「北海道開拓使」の設置（二八六九）は、その終着点のようなものだったことを意味する。要するに、その時点で、「アイヌ

モシリ」は「日本」という法治国家の「一部」になったのである。

明治以降の近代日本は、西洋列強の例に倣って、急速な版図拡大を指した。内地防衛を目的とした周縁地域の「要砦化」と言ってもいいのかもしれない。そして、北海道の「領有」とアイヌ土着民の「同化」は、その後の企みの第一歩であった。これに、清国領だった台湾への出兵（二八七四）、李氏朝鮮とのあいだに起こった軍事衝突（≡江華島事件）（二八七五）、また、さらには「琉球処分」（一八七二～七九）が続いた。日清戦争の戦果として割譲が決まった台湾への日本軍上陸は、大日本帝国の新しい「平定作戦」の始まりに他ならなかった。そして「平定作戦」には、かならず小規模な衝突がつきまとうものだった。反抗の機会を窺う武装勢力との「冷戦」が続いたと言ってもいい。ただ、ここで忘れてならないのは、台湾の現地人といつても、それが一般的な「台湾人」などではなかったということだ。ポルトガル人やオランダ人が「発見」し、対岸の福建地方からも華人が移り住み始めるようになる以前から、この島には、いかなる「新参者」にとつても、島を「平定」する上では避けて通ることのできない人々が棲みついていたのだ。同じく「平定者」として島にやってきた日本軍は、華人と「原住民」のあいだの対立状況を巧みに利用して、「分断統治」を試み、しかも、「原住民」の「平定」にあたっては、かつての清国よりも自分たちの方が手腕に長けているという傲りを抱いていた。北海道アイヌ（≡旧土人）の「同化」に成果を上げたという自負に基づく傲りである。南方台湾の「生蕃」もまた、北方の「旧土人」と同じく、早いうちに日本の統治に服するだろうという期待があったのである。

本論は、二〇世紀の日本文学が列島（≡「琉球弧」）南端・北端の「先住民民族」に与えた表象の来るべき比較に向けた一種の助走である。

## 二、「植民地文学」の四類型

植民地台湾への日本語の侵入は、北海道へのそれを後追いするような形をとった。私は、次のように書いたことがある——《北海道（千島・南樺太）が産み出した明治以降の文学は、先住民民族が後発の入植者による政治的・文化的圧力に屈した世界各地の例に洩れず、次の四タイプに大別できる》<sup>⑦</sup>。

台湾には、漢詩を核に据えた古典的な文芸形式が定着していた（台湾領有後には日本人もこうした伝統を「継承」した）<sup>⑧</sup>。し、中国大陆での白話文の発達に呼応する文芸運動も少しずつ根づくようになるため、こうした「華語文化」にあたるものを考えると、台湾と北海道を同一視することには少なからず無理があるのだが、逆に、その部分を取り除いて、「原住民」の文学だけを取り出して見てみると、「先住民民族」の支配文化への「同化」の度合いに差はあっても、両地域は相似形を示していると言えないだろうか。

以下に、「四類型」についての記述をさらに引いておく。

一、移住（入植）者たちの文学・旧土族を母体とする屯田兵に始まり、大規模農場の拡大や、鉱工業や漁業の近代化とともに導入された労働者（ここには後に朝鮮半島出身者も含まれるようになっていった）が、北海道文学のメインストリームとなる。有島武郎の『カインの末裔』（一九一七）や小林多喜二の『蟹工船』（一九二九）、李恢成の『またふたたびの道』（一九六九）あたりが代表作だ。

二、布教や学術調査の名の下に訪れた知識人による先住民文化の調査報告・英国人ジョン・パチェラーや、ポーランド人プロニスワフ・ピウスーツキ、日本人言語学者金田一京助などが、先駆者である。

三、上記の知識人の知遇を得るなどして、先住民族のなから登場したバイリンガルな表現者たち…『アイヌ神謡集』（一九三三）の編訳者、知里幸恵や、『若い同族（ウタリ）のために』（一九三二）の歌人、バチエラー八重子がこれにあたる。彼女らは植民地主義国家日本の多言語・多文化主義的な国策に追従したかに見えるが、まずは「滅び行くアイヌ」という固定観念に対し、文字表現を通して抗ったアイヌ系表現者と見るべきだろう。

四、北海道という土地の外地性を正面から受け止めようとする内地人作家の実験…中條百合子の『風に乗ってくるコロボックル』（執筆一九二八）や、小熊秀雄の『飛ぶ樺』（一九三五）、鶴田知也の『コシヤメイン記』（一九三六）といった初期の試みもさることながら、武田泰淳の『森と湖のまつり』（一九五八）や池澤夏樹の『静かな大地』（二〇〇三）などは、先住民族を内にかかえこんだ国民国家の構成員が果たすべき使命を批判的にとらえかえす現代文学のもうひとつの最前線である。

はたしてこの「四類型」は、いくつもの先住民族が奥地に雑居する植民地台湾の文学遺産を一望に収めるのに、どれほど役立つだろうか。

まず「日本語で書かれた台湾文学」とは、日本人旅行者や現地滞在者もしくは入植者ばかりではなく、おもに華人系の「本島人」をも含めた多様な出自を持つ作家たちの「合作」だった<sup>⑨</sup>。かりに「先住民族」をこそ「真の台湾人」とみなした場合、佐藤春夫の「女誠扇綺譚」（一九二五）から呂赫若の「清秋」（一九四四）までが、新旧の「移住（入植）者たちの文学」に分類されることになる。華人系の日本語文学の扱いがねじれているという批判があるかもしれないが、本論では「原住民」を焦点化するために、「華人」をすら「入植者」のカテゴリーに収めてしまうという無謀を、敢えて犯そうと思う。少なくとも日本統治期には、上記の「タ

イプ三」に分類できるような一人の作家も生み出すことがなかった台湾の「原住民」の「未開性」に比べて、同じ被植民者であったとは言っても漢字圏の基礎教養を共有していた華人系の台湾人と日本人エリートとは、文字の共有をはじめとするさまざまな共通性（≡共犯性）を示していたと考えられるからである。また「光復」後の台湾の「中華民国化」もまた新しい植民地支配の形態であったと考えるなら、現在の「台湾文学」なるものも、「原住民文学」を除けば、「移住（入植）者たちの文学」以外の何ものでもない。米国をはじめとする南北アメリカ大陸の文学の大半がそうであるように、である。

そして、日本統治期の台湾で、先住民文化の掘り起こしにあずかって力あったのは、『台湾蕃族図譜』（一九一五）や『台湾蕃族誌』（第一巻、一九一七）の森丑之助<sup>⑩</sup>あるいは『原語による台湾高砂族伝説集』（一九三五）の台北帝国大学言語学研究室<sup>⑪</sup>など、日本のアカデミズムだった。日本のアイヌ研究がバチエラーやピウスツキの後を追うものであったのとは違い、台湾の「蕃族」に関しては、日本人の仕事が「光復」後の台湾における研究の先駆をなすものであった。

そして「タイプ四」なのだが、ここには「タイプ一」のなかで「原住民」にこそ「台湾らしさ」を見ようとした一群の作品が含まれる。しかし、日本統治期の「原住民もの」は、そのほとんどが内地人作家によって書かれている。つまり、当時の本島人作家のなかで「原住民」のなかに「台湾らしさ」の証を見出そうとしたものは、見当たらないのである。ロバート・ティアーニーさんが『野生の亜熱帯』*Tropics of Savagery*（二〇一〇）のなかで扱っておられるのは、佐藤春夫の「魔鳥」（一九二三）や「霧社」（一九二五）から大鹿卓の「野蛮人」（一九三六）、中村地平「霧の蕃社」（一九三九）まで、内地人が残したものであり、ここでは「野蛮人を飼い馴らす」*taming savages* とする植民地主義者の欲望が、

「文明を棄つてでも野蠻へと近づこう」going native とする欲望<sup>13</sup>によって裏打ちされているさまが見て取れる。「反乱」と「鎮圧」という血腥い出来事を迂回して進むことなど不可能であった想像力がそこでは試されていた。「平定」という作戦が緊迫感を持って遂行される場所で何が起こりうるのかを考える上で、植民地台湾という場所は、きわめて範例的な場所だったのである。<sup>14</sup>

### 三、「なりすまし」の文学

以下に取り上げたいのは、一九三六年に公刊され、芥川賞（第二回）の対象作となった鶴田知也の『コシヤマイン記』<sup>15</sup>である。鶴田は、それまで左派に属する作家として知られていたが、同作では被抑圧民族としてのアイヌに焦点があてられている。それは帝国主義批判であるにはあったが、同時に、金田一京助が徐々に世に問おうとしていた種類の「カムイ・ユーカリ」の向こうを張るかのような野心的試みでもあった。過去に北海道八雲町に住んだことがあるという経歴に、植民地朝鮮を旅した経験が合わさる形でこの作品は誕生したとは、川村湊氏の読みである。<sup>16</sup>

ところで、この『コシヤマイン記』に関して、北海道の詩人である更科源蔵が、興味深い思い出を書き残している。

ある時「コシヤマイン」の伝承というのが、アイヌ語で発表されたことがある。

イワナイコタン コタンコロ オツテナ シクフ ニシパ アナ  
クネ ラムピリカ ニシパ ネットク、アシル アシ パセニシパ  
ネイルネ パ カ オンネ クルネワ オカイキ。……

（岩内部落の酋長、シクフは心の正しい、衆にすぐれた有名な人で、年も

先住民文学の始まり

老境に達した人であった。）

私はオヤオと思った。これはたしかに何かでよんだことがある。それは鶴田知也の『コシヤマイン記』の第二章の書き出しに似ている。そこで鶴田氏に手紙を出して、それが彼の若い日に過ごした八雲での伝承から取材したかどうかを問い合わせたところ、それは虚構であるということがわかった。誰かアイヌ語のできる人が、日本人の小説をアイヌ語に翻訳したのだった。<sup>17</sup>

このエピソードは、『コシヤマイン記』がいかにも「伝承」の現代語訳を思わせる書きっぷりになっていくかを十分に語っていると思う。それこそ、ラフカディオ・ハーンの「再話」だと長い間考えられてきた「雪女」Yukionnaの話が、じつはハーンの創作が元になって、その後民間伝承のレパートリーとして広がっていったとする遠田勝氏の説を思わせる『口碑化』が、ここでは起こっているのである。

《詩人とはなりすます人だ》O poeta e um fingidor とは、ポルトガルの詩人、フェルナンド・ペソアの有名な詩句だが、鶴田知也の同時代で一種の「なりすまし」を成功させた作家のひとりに中西伊之助がいる。『楮土に芽ぐむもの』（一九二二）で、植民地朝鮮を舞台にした長篇を完成させ、しかも主人公二人を日本人の新聞記者と朝鮮人の貧農に割り振るという果敢な実験を試みた中西は、つづく『汝等の背後から』（一九二四）では、日本人がもはや脇役でしか登場しない小説を日本語で書き、その朝鮮語訳が間もなく完成して、「日本語文学」なるものの同一性がいつしか揺らぎ始めるという現象を引き起こしたのだった。<sup>20</sup>

他方、鶴田知也の挑戦は、『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』（一九三二）に結実した金田一京助のアイヌ伝承研究、そして英雄叙事詩の日本語訳（それは擬古文であったが）に触発されたものとも考えられ、要するに伝承

を現代語訳したかのようにみせかけつつ、帝国日本の支配と搾取を告発する批評性を作中に埋めこもうとめざしたのが『コシヤマイン記』だったのである。日本で書かれた小説でありながら、『カピナトリ』という名のアイヌの《巫女》が祖母から《授つて》、後世に伝えた《神伝》（七頁）だとみせかけることで、これは「アイヌ（語）文学」の「日本語訳」として読むことができる仕掛けになっている。

しかし、コシヤマインの冒険は、金田一が収集した「虎杖丸」のそれにもどこか似ているし、同時に、源義経の悲劇にも似ている。つまり、『コシヤマイン記』には、アイヌの「英雄叙事詩」の味わいと、日本の「軍記物」の味わいが同居しているのである。そして、そこにプロレタリア作家であった鶴田の帝国主義批判が加味されて、きわめてハイブリッドな歴史小説が出来上がっていると言わなければならない。

十五章からなる作品の最後の三章には、「アイヌの地」であったはずの地に入りこんできた「和人」が登場する。

第十三章では、「和人」を前にしたアイヌの劣等意識が次のように語られている。

「……この国土<sup>モシリ</sup>の六倍もある海の向うの国土が、只一人の酋長によって宰領されているのに、俺達は昔ながら一つ一つの部落に分かれているに過ぎない。俺達がオロッコ族より強いように、日本族は俺達よりも強いのだ。俺達は、石でなく金を自由にし、土器でなく陶器をつくり、水楡<sup>チキサニ</sup>の衣でなく紡いだ布を織り、伝承でなく文字を使い、割り抜いた木船でなく板の船を操り、足の下で自然に出来た径でなく手で墾いた道をつけ、銭を飾り物としてでなく品物の交換に用いる理を知らなければ、最早や同族の運命は、オロッコ族よりも惨めであろうよ。コシヤマインよ、俺は、貴方の父上と共に死ななかつ

たのを常に悲しんでいる。」（三九〇―四〇頁）

アイヌたちは、内地からやってくる「和人」<sup>シヤモ</sup>らが享受する文明（《苜蓿<sup>タンバ</sup>》や《酒》や《日本の言葉》——四〇頁）を無視して生きていくことはできないと、徐々に感じ始めている。植民地支配は、反発から始まって、いつしか依存を深める形で進行する。

しかし、同時に文明なるものは、搾取を引き起こすものであり、その手先である人間でさえもが、こうした搾取から自由ではなかった。第十四章は、ひどい傷を負ってコシヤマインの前にあらわれた日本人が、目の前で命を引き取るといふ悲惨な光景を描いている。そして、その日本人は最後にこう言うのだ——「私は死ぬ。もう駄目だ。私は帰り度い。私の国土を一眼見て死に度かったのだ。〔中略〕私達の労働は苦しい。それに私はこんな病人だ。しかし働かなければ打ち殺される。〔中略〕死ぬる迄働かされる。〔中略〕それが親分の戒律だ」（四二―四三頁）。

そして、そう言ったとき、《哀れな日本人は、口と鼻から沢山の血を吐いて泣きながら死》に、《コシヤマインは死骸を抱えて後の叢林の中の丘に運び、頭を死人の故郷の方へ向けて埋め》、「〔そして柳の樹を切り、その先端を三稜の槍の穂形に削り、その頸部に紋様を施した墓標を作つて、それを土の上に立ててや》（四三頁）るのである。

鶴田は、資本主義をたずさえて「北の大地」に乗りこんできた文明、そして先住アイヌに強いられた近代的な奴隷労働に対する徹底的な批判を、アイヌの語り部の声を通して語らせている。この場面を読む読者は、日本人零細民の死をも、コシヤマインに近い立場から見届けることになる。

そして、つづく最終章には、これとは異なったタイプの日本人が登場することになる。内地からくる日本人は、《冬が来》ると《引揚げ》てい

くのが習いだったが、『六人の日本人が残っていた』ことがあった。そして、『彼等は歌を唱い、話し合つて笑つ』ていたので気を許し、コシヤマインは、六人の住む『小舎』までに出かけていったのだった。すると、『六人の日本人は、彼を歓迎して、日本の酒を飲ませ』、『コシヤマインは日本の酒のお礼に神伝オイヤを聞かせたり』(四三〜四四頁)までしたのである。ところが、それは巧妙な罠だった。この後、いきなり『一人の日本人が太い棒を、コシヤマインの後頭部に打降し』(一)他の者共も走り寄つて滅多打ちに』(四五頁)することになるのである。

アイヌの首領たちのなかには、内地日本人の甘言にまんまと騙され、だまし打たれた者が数多くいたと伝えられている。『コシヤマイン記』の主人公もまた同じ運命をたどることになったわけである。そして、この第十五章の終わりは、切々として悲しい。

六人の男達はコシヤマインが全く死んでいるのを確かめた上で、死骸を川に投じた。そして競つて舟に乗込み、彼等の情慾を充すに足る少くとも一人の女の居る対岸へと急いで漕ぎ渡つて行つた。コシヤマインの死骸は、薄氷の張つた川をゆつくりと流れ下り、荒瀬にかかつて幾度か岩に阻まれたが、遂に一気にビンニラの断崖の脚部に打つかった。〔中略〕僅かに氷の上に見えていたコシヤマインの碎けた頭部を、昼は鴉共が啄み、夜は鼠共が漁つて、その脳漿の凡てを喰い尽したのであつた。(四五頁)

こうして鶴田知也は、最初から日本語で書いたものにすぎなくはあつたとしても、来るべき「アイヌ小説」の形をここに示したと言えるだろう。一貫してアイヌの立場から語るといふスタイルがここでは試されたからである。日本人の贖罪意識もまた、ここでは、アイヌがアイヌとし

ての立場から行つた文明批判へと、たくみに翻訳されている。

#### 四、先住民文学への非先住民作家の寄与

今日、台湾では「原住民族文学」の名のもとに、台湾原住民族の現在、そして過去が次々に文学的にトレースされ、そうした作物の総量たるや、日本におけるアイヌ文学にはとうてい太刀打ちできないほどの規模にまで達している。かりにそれが基本的に北京官話を使つて産み出されるものであつたとしても、アイヌ系の日本語文学が、何がしか「アイヌらしさ」を漂わせるものであり、あつたように、台湾の「原住民族文学」には独特の味わいがあり、原住民族の言語がまだ死に絶えてはいないことを高らかに示す誇り高さを内に秘めている。そして、こうした現実を前にすると、いまや「原住民族」ならぬ作家が「原住民族文学」を手掛けるという可能性は逡巡していると思う。日本統治期の台湾では考えられなかつた事態が現実のものとなつているのである。

しかし、一九三〇年代の日本で、強引にも、アイヌの立場ににじり寄りうとした鶴田知也の試みは、早すぎた、それこそ越権とも呼ぶべきものであつたとも言えるが、それは同時に来るべき「アイヌ文学」——「先住民文学」を先取りする「前触れ」であつたとも考えられる。「先住民」としてのアイデンティティを有する作家が、文学を試みようとするとき、たとえば鶴田の試みは、言うまでもなく乗り越えられるべきものであるだろう。しかし、だからといって、それが一顧だにせず葬り去られるべきものだという事にはならないはずである。<sup>24)</sup>

一九三〇年代は、帝国日本の周縁地域(≡外地)で「先住民文学」がさまざまな形で花開いた時代だった。皮肉にも、一九三〇年の霧社事件が、そうした時代の幕開けを告げた格好にもなるが、『コシヤマイン記』の登

場は、「先住民の立場から語る」という文学形式の実験として、記念碑的なものであったと考えたい。それは「野蠻人を飼い馴らす」とする植民地主義者の欲望が、「野蠻へと近づこう」とする欲望と手を携えながら、ついには「先住民を装う」という文学技法へと結実した瞬間でもあった。そして、それは「先住民を飼い馴らすこと」の暴力性に対する、粘り強い抵抗と批判の始まりであったとも言えよう。

ペルーの先住民系文学の台頭を考える上で、一九二〇～三〇年代に台頭した「インディヘニスタ」たちの試行錯誤を抜きにして、それを考えることは難しい。しかも、これに関与したのはかならずしも先住民系の活動家ばかりではなかった。同じように、彼ら「インディヘニスタ」の延長線上に自身を位置づけようとしたホセ・マリア・アルゲダスのような存在は、鶴田知也のような非先住民作家の評価にあたって、ひとつの物差となるだろう。<sup>②</sup>

## 注

- ① 周婉窈『図説・台湾の歴史』（平凡社、二〇〇七）では、「台湾」の由来として次のような説明がなされている——《彼ら〔＝オランダ東インド会社〕はオランダ語でTayouanと呼ばれる場所に新しい堡壘を築いた。Tayouanすなわち「大員」とは、現在の台南の安平である。》したがって、北海道の地名で、たとえば平取がアイヌ語の「崖の間」Pira-utur、紋別や門別がアイヌ語の「静かな河」mo-petから来ているのと同様で、日本でも台湾でも漢字表記の多くは当て字である。
- ② 現在の「北海道」という地名の《名づけ親》は、幕末・維新期の探検家であった松浦武四郎であったとされている（更科源蔵『松浦武四郎 蝦夷への照射』淡交社、一九七三、表紙裏）。
- ③ 花崎皐平は、アイヌ詩人、戸塚美波子の詩句に登場する《我ががモシリ》という言葉をとらえて、次のように書いている——《モシリは、島、国土、世界を意味するアイヌ語であるが、その語源は、「地」「山」を意味

するsiriに「平穩」「温和」「小ぢんまりとした」「一寸した」という意味のho.がついて「島」となり「国」となったとされている。》『静かな大地 松浦武四郎とアイヌ民族』岩波同時代ライブラリー版、一九九三、二〇一頁。

- ④ 池澤夏樹『静かな大地』朝日新聞社、二〇〇三。
- ⑤ 知里幸恵『アイヌ神謡集』岩波文庫、一九七八、三頁。
- ⑥ 遠星北斗『コタン』草風館、一九九五、四三頁。
- ⑦ 西成彦『日本語文学の拡散、収縮、離散』『淡江日本論叢』第三二輯、二〇一六、七二頁。以下の引用も同じ。
- ⑧ 島田謹二の『華麗島文学志——日本詩人の台湾体験』（明治書院、一九九五）は、「征台陣中の森鷗外」から始め、内地人が台湾で残した漢詩から本論を開始している。
- ⑨ 『華麗島文学志』の島田謹二が台湾出身の日本語表現者を考察の対象から外していることに関して、『華麗島文学志』とその時代（三元社、二〇一二）の橋本恭子は、次のように書いている——《島田は戦後、西洋文学の影響を色濃く受けた明治期の日本文学について、「明治の文学は混血児である。その混血児は、近代精神の表現であるとともに、外国文学という異質の血を受けているから、それだけいっそう美しい。血が複雑にまじればまじるほど、じつは異常に美しいものが生れてくる」と述べていた。しかし、彼が歓迎したのはあくまでも「西洋文学」と「日本文学」の「混血児」であって、「日本文学」と「台湾文学」の「混血児」の方は拒んでいたように思えてならない。》（三二六頁）
- ⑩ 遠星北斗の遺稿集『コタン』（一九九五）や知里幸恵の遺稿集『銀のしずく』（二〇〇一）など、アイヌ関係の図書を多数出版してきた草風館が、二〇〇二年以降、『台湾原住民文学選』（下村作次郎、孫大川、土田滋、ワリス・ノカン編）の出版を手掛けるに至った。
- ⑪ 楊南郡『幻の人類学者 森丑乃助』（原政治、宮岡真央子、宮崎聖子編訳、風響社、二〇〇五）。
- ⑫ 安田敏朗は、台湾帝国大学の試みが、東京帝国大学での金田一京助らのアイヌ研究に呼応するものであったとはしながらも、知里幸恵のように《日本語作家》として語り継がれていくような存在を、台湾が生み出さな

いまま、日本の植民地支配が終わった点への注意を喚起している（「知里幸恵と帝国日本語学」『異郷の死 知里幸恵、そのまわり』西成彦、崎山政毅編、人文書院、二〇〇七）。

⑬ ブラジル移民の日本語文学のなかに見る「野蛮へと近づこうとする欲望」に関しては、下記拙稿を参照されたい——「ブラジル日本文学と『カボクロ』問題」『文学史を読みかえる⑧（いま）を読みかえる』インパクト出版会、二〇〇七、六九〜八九頁。

⑭ 五十年間に及んだ日本の台湾統治のなかで、「霧社事件」（一九三〇）に内地作家が応答を試みたことは知られているが、『漢人の最後にして最大の抗日革命』（周婉筠・前掲書、一〇五〜六頁）であった「タバニー事件（別名：西来庵事件）」（一九一五）に対しても、日本内地では菊池寛が即座に「暴徒の子」（一九一六）を発表するなどしたことは、あまり知られてはいない。金牡蘭氏の博士論文『われわれ』のアイランド——日本と植民地朝鮮におけるアイランド文学の（移 動）（筑波大学、二〇〇八）の「第四章」は、当時、菊池が関心を抱いていたグレゴリー夫人をはじめとするアイランド文学との関連を扱っており、日本及びその植民地におけるアイランド文学の受容を考える上でも、きわめて示唆に富んでいる。何より、「霧社事件」のような「原住民」の反乱ではなく、相対的には「文明化」されていた「漢人」による「抗日革命」に、大英帝国植民地アイランドのナショナリズムに通じるものを見出したところとを、興味深い。植民地台湾における「漢人」の反乱と「原住民」のそれとを、混同しない姿勢の重要性が見取れるように思う。

⑮ 以下、同作からの引用は、現代仮名使いを用いた講談社文芸文庫版を用い、本文中に頁数を記入した。

⑯ 川村湊は、講談社文芸文庫版『コシヤマイン記』の「解説」のなかで以下のように書いている——《彼が北海道の先住民であり、侵略者としての異民族の「和人」に追いたてられるように、本来の土地を追われ、流離しなければならなかったアイヌ民族の物語を作品化しようと考えたのは、実姉がその夫の赴任のために居住していた朝鮮半島へ行き（一九二六年十一月）、そこで被植民地の朝鮮人の実情を見てきたからではないだろうか。》（二一九頁）

⑰ 更科源蔵『アイヌと日本人』NHKブックス、一九七〇、六三〜四頁。

⑱ 遠田勝「転生する物語——小泉八雲「怪談」の世界」新曜社、二〇一一、一〇〇頁。

⑲ 『海外詩文庫⑯ペソア詩集』（澤田直訳、思潮社、二〇〇八）では、『詩人はふりをするものだ／そのふりは完璧すぎて／ほんとうに感じてい／苦痛のふりまでしてしまふ（……）』（二〇頁）となっている。

⑳ 『汝等の背後より』——はたして、その「赤インキ」の文字は何語だったのだろうか。冊子を彼女からじかに受け取ったのは、ハンゲルですら読み書きできるとはかぎらない朝鮮人の少年であった。それでもふつうに考えれば朝鮮語だっただろう。しかし「ヒロインの」権朱英が「投擲通信」のように死の間際に手渡したものを中西伊之助なる内地人作家が、日本語読者に手渡そうとしたのだと「メタ小説」風にこの部分を読めば、それは日本語でなければならぬことになる。（西成彦『バイリンガルな夢と憂鬱』人文書院、二〇一四、一二三〜四頁）『コシヤマイン記』もまたアイヌ語と日本語の同一性を揺り動かす、二言語の境界領域に語りが据えられており、更科源蔵が書いている「口碑化」のエピソードは、まさにこのことを裏書きしていると言ってよい。

㉑ 在台経験のある日本人の文学のなかで、坂口襦子の「蕃婦ロボウの話」について書いた文章を以下に引いておく。内地日本人が試みた、もうひとつの「なりすまし文学」として、『コシヤマインの記』とは異なる意味で、重要な作品であると考えられるからである——

《彼女の台湾滞在期間は、一九四〇年から四六年までという五年余りで、決して長くはなかったが、そもそも「蕃人」については関心が深かったと見え、また戦争末期には蕃地への疎開経験もあって、その「蕃地もの」は、これまでもあちこちで注目を集めてきた。

『植民地を読む』——「贗」日本人たちの肖像（法政大学出版局、二〇一六）の星名宏修も、同書の「第四章」では、帝国の日本の周縁部に生じた「混血児」の問題を扱い、内地日本人巡査と蕃人女性のあいだに生まれた「混血児」の結婚問題を描いた「時計草」（初出一九四二）を重要な作品として取り上げている。「蕃地女性」との結婚の結果生じた「混血児」は、「内地人女性」と結婚するか、「蕃人女性」と結婚するかで悩むのだが、女性



作家、坂口樗子は、「蕃人の血が入った混血児」との結婚を欲望する「内地女性」の声を以下のように記している——《貴方の前進なさることは、高砂族の方と血縁を深めるだけが道ではございません。高砂族の文化を、日本の伝統に少しでも近寄せ高めめるのも前進ではないでせうか。》（二一八頁から再引用）

「蕃人男性」との結婚を夢見るわけではないものの、「混血児」との結婚を決意する「内地女性」の物語を「内地女性」が小説として書いたということ。台湾時代の坂口の作風は、「内地人の血」と「蕃人の血」をどう交わらせるかにおもな関心があったのである。

しかし、その坂口は、戦後に引揚げてきたあとも、引き続き、「蕃地も」を量産する。なかでも、評価が高いのは、第四回芥川賞の候補作にもなった「蕃婦ロポウの話」（初出一九六〇）で、これは『戦争×文学』：帝国日本と台湾・南方（集英社、二〇一二）に拾われている。

一九七〇年代以降、「からゆきさん」や、「元従軍慰安婦」などへの聞き取りが進められるようになり、そこで浮上してきた「女の語り」の問題系（「サバルタン問題」を見透かしたかのような語り口は、いま読んでも新鮮だし、坂口自身が十数年前の「霧社事件」の記憶を口碑に聴き取った「部外者」であったが故に、その距離感が、かえって物語を「真実の語り」ではなく、「何度も語り直されてきた語り」として提示できていた。

同じ「蕃婦」として生きてきた「ハツエ」という女性が、粘り強く、時には茶化し、時にはおだてすかしながら、「蕃婦ロポウ」が《日本語・台湾・タイヤル語をこっちゃんにして〔中略〕早口でせつせとしゃべる》（四一六頁）のを、何とか最後まで話させるのだ。

雑誌『社会文学』二八号（日本社会文学会、二〇〇六）に掲載された李文茹氏の論文「ジェンダーから見た台湾『原住民』の記憶と表象——霧社事件を中心に——」は、「モーナ・ルダオの英雄性」を軸にして、えてして男性中心に語られがちな「霧社事件」という名の「大きな物語」に對置された「小さな物語」としての「蕃婦ロポウの話」に注目している。それは《男性中心的な歴史記述からの逸脱》（一〇七頁）をもくろむ《彼女》の霧社事件》（一〇四頁）の物語であるというわけである。

霧社事件で夫を亡くし、フヌケのようになりながらも、蕃社を出て移住

地へと連行されていく途中、内地人の巡査と恋に落ち、最後は崖から身を投げて心中を果たす。そんなロポウ（《男のなさけをうけておれば、肌はあのように白く輝くものかのオ》）をふり返りながら語るハツエもまた、夫を「高砂義勇隊」にとられて、孤独に耐えている——《婿どのが戻ってきて、オレの体に露をしたたらせてくれたら、オレもみごと返花ささせるかのオ、おほつかないのオ》（四一九頁）

李氏も指摘しているように、この小説では《近代的市民社会で隠すべきだと思われる性に関する部分の強調によって「蕃女」のプリミティヴな一面》が《際立たせ》られているだけでなく、そうすることで《山地で問題となった日本人男性によるセクシャルな暴力が〔中略〕矮小化》（一〇七頁）されてしまっているというクライがある。しかし、そうした歯に衣を着せない、あからさまな「ハツエ」の語り口を一方では見下しながら、しかし決して耳をふさぐわけではなく、むしろ喜々としてこれに耳を傾け、まさに「蕃女のセクシャリティ」をむさぼるようにして「追体験」しようとする「内地女性」。その衝動とは何だったのか。

「からゆきさん」であれ、「元従軍慰安婦」であれの「語り」に耳を傾ける者は、男であれ、女であれ、自分自身のセクシャリティをもって、それによつたてゆくしかない。男の場合にはそれが「ボルノグラフィック」なものに陥りがちだし、男に向かって過去の性体験を語る女性はそうした男たちの好色な耳を意識しないではおれないだろうから、おのずと禁欲的になるはずなのだが、女から女への語りのなかには、そうした「遠慮」が消え去る瞬間が訪れることがある。そこには、裸の付き合いが生まれるのだ。

「蕃婦ロポウの話」は、「内地女性」と「蕃人女性」のあいだで、たがいが牽制を加えつつも、その「遠慮が消え去る瞬間」をこそ描いた小説なのである。（フェイスイブック・サイト『複数の胸騒ぎ』二〇一六年九月二二日掲載）

②② その遺稿となった論文「ペルーにおけるインディヘニスモの存在理由」のなかで、アルゲダスは《インディヘニスモ文学は、僕婢以外の運命は考えられない墮落したインディオ〔中略〕というイメージが根柢のないものであることを示した。インディヘニスモと呼ばれる物語、告発の記録とし

てだけではなく、原住民が人間的可能性において欠陥がないことを明らかにした点で意義がある」と語っている（細谷広美訳、『現代思想／臨時増刊／ラテンアメリカ』青土社、一九八八、六九頁）。なお、『現代思想』の同じ「特集」に収められた「ホセ・マリア・アルゲダス——ふたつの貌」という評論のなかで、ジョン・V・ムラは《アンデスの人々の生活やしきたり》にこだわりつづけたアルゲダスが、《彼等のことばを知っているばかりか、それが自分の創作行為の基本になっているとさえ考えていた》（原毅彦訳、前掲書、九〇頁）ことに注目している。今回取り扱った鶴田知也に関して、講談社文芸文庫版『コシヤマイン記』の「解説」のなかで、川村湊は《鶴田夫人の回想によると、アイヌ語の単語を丹念に書き込んだノートが存在したという》（二二五頁）と、伝聞形式で鶴田のアイヌ語力

について書いているが、そうした「単語」レベルの知識で、それを「創作行為の基本」にまで高めることができたのかどうかは疑問である。しかし、「北海道」周辺地域の先住民文化であったアイヌが「人間的可能性において欠陥がないことを明らかにし」ようとしたことだけは、明らかだろう。それはかならずしも先住民の文化を「継承」しているわけではない作家の試みとしてはきわめて野心的であったし、何度も言うが、それは、アイヌ系文学に限らない、また日本語による文学創造にも限らない、「先住民文学」の「ひとつの始まり」であり、とりわけ「マジヨリテイの言語を用いた先住民系文学」の「前触れ」ではあったはずだからである。

（本学先端総合学術研究科教授）